

ビジネスの糧になる四千年の故事成語



四千年の故事成語と題しまして、これから皆さまを『三国志』あり『史記』あり、漢詩あり、含蓄あふれる中国古典の世界へのご案内いたします。激動の歴史を経ても、なお輝き続ける言の葉から、悠久の風と、ビジネスのヒントを感じ取っていただけたらうれしいです。

【読書百遍義自ら見る】

(どくしょひゃっぺん ぎ おのずからあらわる)

まだまだ一部の受験生にとっては気が抜けない日々が続きますが、この季節になるとやれ「蛍雪」だ、それ「四当五落」だと夜毎、受験勉強の机に向かった時代を懐かしく思い出す読者諸氏も多いのではないのでしょうか。そこで本日は史書『三国志』から、読書と学びに関する言の葉をご紹介します。

「読書百遍義自ら見る」、あるいは「読書百遍意自ずから通ず(どくしょひゃっぺん い おのずからつうず)」としてご存知の方も多いかもしれません。

世は三国、董遇(とうぐう)という人がいました。歴史ファンを惹きつけてやまない物語『三国志』(三国演義)では何故か無名の士ですが、魏・明帝(曹叡)の治世には大司農(財務相に相当)まで務めた人物です。勉強家で、学者としても名高い董遇でしたが、ある日、教えを請うた人に答えて曰く「読書百遍義自ら見る」つまり「どんなに難しい書物であっても100回も読めば自然と意味が分かるようになる」と諭したのだとか。とかく乱読・略読流行りの昨今ですが(それらもビジネスに利するところ大ですが)1冊の本をじっくりと、精読・熟読してみることの重要性をズバツと突いている名言ではありませんか。

さて、実はこの物語には続きがあります。教えを請うた彼はなんと、董遇にすげなく断られてもなお「だってヒマがないんです！」と食い下がりました。それはそうです、同じ本を100回も繰り返し読む時間など、なかなか取れるものではありません。しかしながらそこは董遇、そんな彼をあらためて諭します。「三余に読むのです。冬は年の余り、夜は日の余り、雨は時の余り、ヒマを見つけて励みなさい」と。時間のないことを理由に読書を怠っている身からすれば、何とも耳が痛いお話であります。

余談になりますが、董遇は時代を代表する研究者として『老子』等に注釈を加えました。その際に用いたのが朱墨であったことから、添削することを「朱を入れる」と表すようになったと伝えられています。

余談ついでにもうひとつ。魏の明帝とは卑弥呼に「親魏倭王」の金印を送ったとされている皇帝です。邪馬台国の使者が、もしかすると要職にあった董遇にも会っていたかもしれない...「三余」の冬の夜、窓辺に雪を積み、いにしへのドラマに思いを馳せながら書をひもとくのもまた楽しからずや、ではないでしょうか。